

情報発信系演習における

文脈的活動とキャリア教育としての意味付け

- 短期大学における卒業研究セミナーの事例分析を通じて -

長田尚子・村田信行

(清泉女学院短期大学 国際コミュニケーション科)

本研究が対象とする短期大学 2 年次の卒業研究セミナーでは、初年次教育と専門科目で得た知識の統合的な活用と、キャリア意識の醸成を目指して、社会的文脈によるプロジェクト学習を行っている。本研究では、「1 年生を読者とした学科内広報紙の作成」という文脈を付与した情報発信系演習の事例分析を行う。分析を通じ、文脈を与えた学習活動の意義を検討し、効果的なプロジェクト学習をデザインするための要件の抽出を目的とする。

1. 研究の背景

文脈を重視する教授学習理論(CTL: contextual teaching and learning) では、学習に社会的な文脈を付与することにより、学習目的の理解や学習意欲の促進が図られ、高い成果に結びつくとされている(ex. Parnell, 1995; Johnson, 2002)。その中でも、職業的文脈によるプロジェクト学習は、学業の職業場面への連携、キャリア意識の深化に繋がることが示されている(ex. Parnell, 2001)。しかし、文脈そのものや与え方に関する考察は少ない。

一方、文脈を重層的に捉えている分野も存在する。状況論では、文脈を、社会的枠組みとしての静的なもの、相互作用を通じて生み出される動的なものとして捉えている(ex. Lave, 1995)。Problem-Based Learning 研究では、小学生が公園の設計をするプロジェクトに、怪我をした友達のために土地開発者に安全な設計を提案するという問題を加えることで、振り返りや質を高める活動が促進されたとの報告がある(Barron et. al., 1998)。企業でのキャリア発達研究では、文脈における何らかのトリガーによるイベントによって、本人が経験の意味形成を行い、自らの教訓としていることが報告されている(谷口, 2006)。これらの研究から、プロジェクト学習における社会的文脈を重層的にデザインすることにより、学生による自律的な振り返りや、成果の質を高める活動の促進が想定できる。

2. 授業の概要

対象の卒業研究セミナーでは、分かりやすい情報発信とはどのようなものかを多様なメディアを想定して検討している。その授業において、学科内広報紙の作成プロジェクトを実施した。学生には広報局に属して活動するという社会的枠組みとしての文脈を与えた。それに加え、入学直後で戸惑いのある 1 年生を読者に想定するという状況を設定した。

広報紙の作成は、春学期 15 回の授業の後半部分で行った。全体で 12 名の学生を 3 グループに分け、広報局の中に局長(教員)以下、編集部が 3 つあるという設定で活動した。**広報紙作成活動**: 企業における組織として運営した。各編集部が DTP ソフトを用いてそれぞれ広報紙を完成し、学期末に 1 年生に配布することを目標とした。各編集部には記事の企画からスケジュール管理、役割分担までを十分に話し合い自律的に活動するように求めた。また、定期的に検討内容および進捗状況のレビューミーティングを全員で行った。

情報の受け手の想定：情報の受け手は後輩にあたる同学科1年生とした。学生は、短大に入学した1年生がどこでどう苦勞するのかを前年度に自ら体験している。自らの経験を踏まえて1年生のニーズを検討し、記事の企画や紙面の展開に反映するよう指示した。

初年次教育、専門科目との関係：学生は、初年次教育の中で、レポートの書き方や文章表現の基礎を学んでいる。また、WEB ページ作成、DTP ソフトを用いたポスター作成など、情報発信に関する専門科目を選択している。さらに、広報紙の作成に先立つ授業では、分かりやすい情報表現に関する事例研究と、広報紙作成の流れの解説を行っている。

文脈から想定できる活動：文脈が効果的に働くと、学生が次のような活動を自律的に展開するものと期待できる。1) 情報の受け手の立場に立った情報発信。記事や写真の取捨選択、文体の工夫など、1年生を中心に検討し、質を高めること。また、これらについての自らの振り返り。2) 広報のプロとして、DTP ソフトの使用法を検討し、適正な取材、執筆と校正、レイアウト検討、著作権の考慮などを行うこと。また、これらについての振り返り。

3. 活動状況の分析

想定した活動を学生が行っていたのかを確認するために、活動終了後、a) 春学期に達成できたこと b) 春学期にやり残したことや新たに気づいた課題の2点について、それぞれ最大5項目を上限として箇条書きするよう求めた。記述された項目は下表に分類した。

活動終了後の記述項目の内訳	初年次教育、専門科目に関する項目	広報紙作成活動に関する項目	本人の意欲・動機付けに関する項目
a) 達成できたこと	25	24	5
b) やり残したこと、気づいた課題	35	7	8

表の a) から、学生は、初年次教育や専門科目で得た知識の活用も含み、広報紙作成について達成感を持っていたといえる。情報の受け手である1年生が抱える問題の解決をきっかけとして質を高める活動へとつなげていた。いずれのグループにおいても、紙面の企画、記事の選定と執筆でとまどいや遅れが見られたが、1年生を想定することを再認識することにより作業が円滑に進んでいた。同じ DTP ソフトを用いて1年生が作成した日本紹介の資料を検討してみると、韓国の姉妹校の学生という情報の受け手を想定した見直しを行ったグループの紙面の質が高いこともわかっている。表の b) からは、活動後、初年次教育、専門科目関係の知識に関する振り返りや気づきがあることがわかる。一例として、記事の文章の執筆について振り返った学生は、インタビュー方法に原因があるものと考え、インタビュー技法に関する実証的な研究を個人のテーマとしている。以上から、社会的枠組みと解決すべき問題という重層的な文脈を付与することにより、プロジェクト活動の質が高まるとともに、知識の統合的利用や振り返りが行われることが示唆される。

最後に、キャリア教育の視点からの考察を加える。キャリア教育で重要なことは、「望ましい意味や価値を教えることではなく、体験の種類や内容でもない。自分が関与する体験の中に、意味と価値を見出す能力と態度を（たとえば、情報を精査し検討する姿勢）一人一人が獲得する」ことである(渡辺, 2009)。この点を踏まえると、本実践において、1年生の問題を解決するために、学生自身が職業的な文脈を効果的に用いて成果の質を高める活動を行えたことは、キャリア教育としても評価することが可能である。正課におけるキャリア教育を考えていく上で、このような文脈的活動の意義を改めて問い直したい。